



Title	社会学特講
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1965
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77362
Type	manuscript
Note	昭和四十年年度 修士課程 鈴木教授
File Information	N037_01S40.pdf



[Instructions for use](#)

NOTE BOOK

Manufactured with best ruled foolscap

社會學特講
昭和四十年度

VOL. _____

備士課程

鈴木教授

OX
30



現在のおけは日本における社会現象の
研究には、これかほん可なりである
花の空際な社会変化をみるに
門の外野に對する種々の口民律の
變化は、先多に著つておるが、
新法界の金部以後、立つ清野を
と念いつい、その意味で都市化は
代化に外ならぬ事を述べておる。

人々の社会も成長して、ある発展の過
程をたどつてきた。勤的の習性、
解が社会学的な行動には、方一に必要であ
る。その自然は同一か、とあるし、
今の自然は同一か、とあるし、
とあるし、
AとBの關係は一年毎に異なる。10人に
ついても、村や家、
社会をみるには、関係の形式と云い、
社会をみるには、関係の形式と云い、

現代日本の社会変化の都市化といふの
理解

一 都市化の二類型

村落の都市化

村落の二類

前近代的村落と近代村落

前近代社会より近代社会へ

常縁村落より落着村落へ

成員交替の厚薄の二種

日本の自然村と直不家族

近代化の内容

個人主義化、自由主義化、

合理主義化、契約主義化、

民主主義化

道と云ふか、形式を構造し、変化して、
新は、日本の国民社会の、研究し
たか、日本の国民社会は、新の眼で
村々の交流、理の軌、この成長の
二、三、年、も、お、か、り、村、の、時、代、を、理、解、し、
代、の、見、か、は、境、内、の、各、地、に、り、
め、い、て、い、く、人、や、物、や、心、の、流、動、の、標、の、
連、な、る、方、向、を、お、し、た、
の、巨、大、な、理、念、を、こ、と、し、こ、と、し、こ、と、し、こ、と、し、こ、と、し、
上、下、の、理、念、の、解、り、こ、と、し、こ、と、し、こ、と、し、こ、と、し、
流、動、の、理、念、も、大、任、に、向、つ、て、
い、か、ら、上、り、か、下、り、の、流、動、の、理、念、
を、お、し、た、
分、け、し、た、
法、令、の、形、式、を、
或、は、
ある、か、
し、の、
新、學、は、
と、理、解、の、
仕、才、か、
如、何、は、
要、か、
あ、

前近代、近代の特征

集團主義、傳統主義、支配者本位

愛憎主義、親分中心

集團における前近代、近代、近代

直系家族と夫婦家族

自然村と自治体

君主制と民権制

封建的領土制、
封建的領土制、
統治者選考制

代表者の選舉

集團の行、
義勝の権利、
常樂の体制

さかば、今の私達の身に四にあげ、
世のうづり持の影をいせ、をいれは、
にうづり持の影をいせ、をいれは、

嘗て日本のおのり、二十年前も、
一枚の田圃の形、その味、
多し、愛、大いかなか、

その村、年々、を先は、
し、年々、に、な、
に、用、を、に、

く、り、し、な、か、
村、の、影、を、い、
他、で、あ、る、

な、道、路、が、
な、道、路、が、
な、道、路、が、

お、り、な、る、
は、二、
は、二、
は、二、

人、と、人、の、
絶、え、を、
絶、え、を、

前近代社会の残影の影は、
日本にあげ、都市化は、
有して、い、い、い、い、

日本にあげ、都市化は、
有して、い、い、い、い、

有して、い、い、い、い、

かた、い、理、由、は、
かた、い、理、由、は、

村、世、代、の、
村、世、代、の、

化、で、あ、る、

口、家、の、
口、家、の、

自、然、村、の、
自、然、村、の、

に、関、係、す、
に、関、係、す、

この国は去年と今年とは大きく
変化している。東西の二大勢力の
対立の国は去年の比、ではな
い。日本の立場はそれによつて
いよいよ日本の社原を著者が西
向と東向の二大潮流に於いて
の自主的立場の確立の必要を
成すものがある。日本の社原を
成すものは、日本の社原を成す
ものと思ふ。日本の社原を成す
ものは、日本の社原を成すもの
である。

現時の日本の急激な社会変化は
国家の枠をばつして経済の国際
的交流、文化団体の国際的交流
他人の世界旅行を自由とした
為、一時に世界の波が口々に
おし寄せたのである。何れも世界
的市場でその力や価値が物を
とらへたのである。
国家の枠がこんなに取りはなされ
ては正に有史以来の事である。
急激な社会変化と云ふ事は
可成りである。

口米の場合と同様に口内の古くからの自然村の幹が近年中に消滅し、くにはほとんど消滅した事も見逃してはならない。昭和三十一年頃から始まる町村合併にとともに、新村内の交通路の急激な整備と中央農産の地方通売に伴い各種機械園の設置と末端都市の急増は口民の休眼的労働力を一歩の活用し口民生活の急激な向上を結果した。今口民が皆都市生活に参加するに着手したので、

ある。

近頃のものは、去都市化の意思は
溢れやうに、巴の地帯である。日本の
は、都市化は二類のついでに考へな
ければならぬ。

才一回 (四〇五、一一、一一三)

「口民知階層の口階層意識、意識」

この社会不意。口階層意識場このの

一般口民は自己の生活の自己中への

印象的理解を断片的で、而もそれ

を正しくするに不慣れである。そんな

口民同志の接觸は相互抗爭を

のみである。

社会的に処理し、科学的に再整理

社会学者が自己の口民の生活の意識

や志向を組織的に整理し

右結果を據てより相互の理解を

進めよう。*不意解や対立

や敵意を正しく、嚴格な科学的知識

木曜 12時 医科歯科大学

石場

の會堂においで一掃し、相互の理解

と善意を深め、(平和的) 協力を通じ

ることに当然に命ぜらるる。

そのおりに何よりも社厚を互に自己

の口民の生活に充ちて調和を研究

すべし。か必要である。その意味は、

学術の實際的研究は現在より自己

の足下の研究が最も重要である。

を研究する。か、それはその研究が

をねむに終る。は、他は、

序の又他。工業的時における

のにおき、場合がある。は、

心得

⑥

口民記号は意味や價値基準等の共同
の記号。外部には用他不可既の記号、
内部は共同者のみかたわしく判り得る記号。
然し他に判り得る者も下る。

⑦ 又人同生活の内は他の口民は理解
され難い微妙な感情的の下のものは、容易
に判り得る方面とせよ。他の口民は
に同する研究や他の時代の同する研究が困難
でない領域とせよ。

組織的記号

よか。その場合も、記号学をその専考
の記号は現在の足下の記号にあつ
可きとあつ、互にかつとの積むに組織
的であつたにいつては構へつあつた
よか。記号学は記号の日本人は日本語を
用ひて記号に日本人の心を具現し、
記号学は記号の日本人は日本語によつて
成るしな計はなす。日本語の日本人
の心で記号の表れは記号学的記号
はよか。記号学は日本人の記号学には縁の
ないものではない。日本人の社会は日本
本人の生活の成長を正しく記号する。

此の二、又その子を道しつて世考の初めを以て
重配するものがある。世界の金の民はたゞ
其のどの有の理の確立による世界は此層な
る其の元より其考元は此の元の時と
日本に於いては宗魂が左の中、人的な
性を多岐を以てするものである。

要之他から知るかたの部分を相あるものと
か大抵は知るかたの下である。知る
他から知るかたの知るに強辭や敵討
の要因は此のものがあつた、これに此の
其の正し強辭は表はれによつて相ある
正し強辭は強くするが、此の元

の役を果すのが、実証的批評学である
ことである。

私の希望では

諸君の社会的な判断力を増大する
事に役立つ清義や指導をしてい
る。社会的知識の量を増し、その内容を
たゆみなく、社会的な思考力を充
てて多く強化してあげたい。
その中心強さと共に勉勵する。心構
へである。おんが導くおのりでは
なく、一統の道に歩むべき所を
たづねる。

その力は、実質する物の力が多く、
かけぬべき、おんが導くおのりでは

新知識の習得に必要とする知識の
深さや道に迷いつつな場合にも新知識の
が早く気がつくてありき。
その力をつけよう。又一定の
解によつて指導するのつたなく法則の
研究に力をつける。研究の形式
であるから、新知識が活用し得る
程度までその分際でも利用す
る。
教える人の専門に應じて学生が自
らその指導を受けようとする。はたして
一人一人の必要とする研究の進捗に應じて

て散るゝ人がゆゑなまを氷くゝの力
をよみへゝと云ふや針を期待しゝゝ
異作のほは五の^{セツ} 中のものと思ふ
か、この方針の主目には分つて世をいへ
と云ふ子は積累は、この是もでも
その形へを考りたへ人かうは表行、
原もをすかよつ。余一清層の
本に拘束されたい形に、この注意の
あよ、
研究の成長に從つて、本攻の變化
は、次方があつてを認めよ。
和の希望は、高の梅の女、か、勤女の

甲乙先々実現させ得るものもあ
らう。制度の中の大学の院には色々
のさまりがある。然し私の希望では
せめて大学院へは昔の私塾の
格を、教授の待遇が期待される。
今の日本の大学院は成長しつつある
ので、一つの大学院の専攻として私
塾の格を、物の院とした大学院
の制もあつてよいはなつか。

#

今の日本の民生生活の變化の概由なること
もりは何か。その一は家族制の變化

その二は村落制の變化。その一は直島

家族より夫婦家族へその二は常緑村型

の村落より海草村型の村落（日本

では都市よりも常緑村型より海草村

型への移行、かどらふた。交易職の死滅

の變化、テリトリの習俗

等

東京の都市より工業のへ

前近代より近代社会へ

都市化の過程
資本主義の時代
帝統制のより海草村型の一成立

カニ回

伝説の社会学的研究能力を強化す

その一は設立の構想を述べたのか念死

である。和の山ついでに、研究の念

を述べ、研究の念を述べた。研究の念

を述べ、研究の念を述べた。研究の念

を述べ、研究の念を述べた。研究の念

から、一應の社会学の社会学の区及

に及ぶ、あぐり可なり、大に、し、ホ、

口民生活の体系的變化の基礎をな

して、い、し、は、何か、直島、

夫婦家族へ。日本の直島家族は

家族制家族へ。日本の直島家族は

家系権家族の存在。欧米人の中心視覚

一家心中型家族。家毎に秘密の

独立口。同族制の鼓調の家の

独立性が軽視されてい。日本では

運命共同体、仲間関係は家内

あり、それ以上でもなくそれ以下でも

あつるの強弱。家中心への

クらし、島根の青回村。

人生活の基盤の基礎。我々の

組織は人生活がたつたから。

日本人の物産の北と、及ぼさ

ておる。

年次表展同式では道多字福休

⑤ 夫が家族の時に、人は一生の生か

を自分の家系にするか出るか。他家に嫁

した婦人も、その去つた場合は、^{不幸にして}可成り苦

一年持つてゐた、結婚の場合、婦人も一生を

に守り出すか出るか。夫も一生を

守るべきか、或は其の企業が、増大するにつれて、

家系を失つた妻も、或は其の企業に在り、

有る年、其の妻も、或は其の企業に在り、

其の妻も、或は其の企業に在り、

其の妻も、或は其の企業に在り、

其の妻も、或は其の企業に在り、

其の妻も、或は其の企業に在り、

無限に反響する。其妻の人生の

中で、家は其の存在する。女子

の地位の弱く、夫が其の男女老

若か、其の生活、人生に、世に其の

老して死すや、一歩其の心の中。⑥

人道の発見は、老人の病人を其の

一団に加へ、其の夫、婦、家族

は、才と、其の結合。其の其の情

その人、其の自由を、其の世に

其の家族、其の其の家族は、其の

其の結婚の、其の自由。自由、其の

其の理の、其の其の。

今世姓づけ日本の高令厚が飛
いぬけと高いの男姓には骨柄を
の高令厚が高い。その此令の意
味は何れか

田中 〇〇〇はホト多クトの此令の意が

女性らしいは日本の此令を云ふか其の

此令の的説明を加えようであり。

嫁姑の同姓の村より社会学的不

況は甚く重要なる研究である。

は私に既して有双して述べたことか、

この同姓は両方御にかは、
高令の自家から解決すべし。

高令の自家から解決すべし。

中三回

日本の民衆の現時における生活の

変化の主軸になった。変化の第一は

家族制における変化——直系家族より

夫婦家族へとなつてあつた。これは口民社

論における^備質的な変化を意味する。し

て、あつた。前回の著者「おんが

才」の主軸的変化は地域生活共同

体における^記変化である。これは口民の

生活協力の形式における変化を意味する。

封建的生活共同体より開放的生活

共同体への変化を意味する。私の所

謂自然村よりそれに対応する概念と

してあげしれは行政村への変化である。
自身村もかつて明治初期までは当時の行政村であつたものである。當分の行政村の経路が自身村になつてゐる。昔曾ての口民衆合のコンセキが民衆となつてある。何時の時代にも暴カルよりの支持される。この政治力は人間社会における最層力の決定をたあす。文存の初期に何人かの学生が口衆制限起原説を主張した。その人同團體の心理学的分析が述べられてゐる。この巨視的知識家は遠くはるかたが口衆制限説のその時の研究は同

にそれ一つなら、政治いおけは恭方は見落
それはいない。マルキス・マクスウェル

新の所習自然村は太田の授地以て

に~~四~~下年、百姓はその村から移住す

すも他の職者につくすも禁止され

いおのへあよ。百姓はその村に生れ

百姓をしその村で死ぬすも強力な政治

力のもとに命令つけられていおのへあよ。

幕末まで年貢即ち税金はその村を

累位としる為が定めてあったがり、人

の労働の措けは村中へ回しあり、

次の組中では更に回しあり。百姓

家康の百姓親

より、重税により統治者が兵を
増し中央の力を増進して、漸くは公地
の民の制が甲申の代に大化の改新以
てこの口を統治の常道であつたと思は
れぬ。戸籍と隣保の制など四面海の口。
百姓より一家の財源を得るには、百
姓を打つるため、粟子に統のせしめをかく
るがゆゑであつた。宋唐のそ業。
百姓は植物の根の土地に定着せしむる事
がなかつた。
統治者は口民をその口土から出す事をすす。
去せば税金と口力かそれ丈へなかつた。

口境の線のきざしは中口の囲禁、日本米口を属
の他、台湾の糖麦。

口境の高さ。口境内の社会関係は定額社
原を形成する。マキーハのコミュニティーとア
ンエーション。高田博士の金庫等。

自然村は成員更新の常態維持型。年々同
一成員。繁の考加着。五十年で全員更新。
毎年更新。少額

近代口家の自治体は藩閥型。

代表者の選出、投票。期限。多額決り。
議決決定。

自然村下の傳統的、集团的、感情的
(厚意を越) (他人を越) (合理を越)

自然村の都市化現象の進行は縮形

直後から 林活劇の史

明治三十年頃から 養蚕革命

大正十年頃から 農民組合

昭和七八年頃より 都市工場への急増

昭和三十年頃の山村合併

昭和三十年頃より 工業の高成長

急激な都市化

市の都市化現況 (昭和十五年頃)

- 1. 市町村
- 2. 組合村
- 3. 農場村

今更村は農場地帯となりつつあり、
アメリカのカートンコミューニティーの研究を
模倣

日本農村の急激な生活圏の急拡大より、
農村、農村生活圏の急拡大より。

先之より居んた心のは何人我自由を并
合理な我の生活である。交易の自由は
代表の程、都市の力、義徳人徳の
赤決済の豊かさを。

才四回講義 (六月八日)

日本の戦時の急進的近代化の転軸を

たすものは、専ら皇室から夫婦家族

への家族近代化と自然村より近代化

宗の自治体への地域的協力組織の近代

化を志す。一、わが皇室の近代化は同じ皇室

地域的協力の組織の近代化の中心である。この

に因連した理論を、皇室の研究の中心に考へ

る。皇室の中心は、皇室の中心に考へる。この

を皇室の理論と組織の中心の近代化の転軸の意義を述べ

る。村社分類の三類

一、皇室の中心に考へる。皇室の中心に考へる。この

4 行政組織の基盤

生活圏拡大の方向。隣境、村境、口境
民族、方言、地味色は皆行政圏の中心

成る。皇室の近代化にまつたのは、自然村から自治体

への近代化である。この皇室の中心に考へる。この

我々の皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

の近代化は、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

一、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

一、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

一、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

一、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

一、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

一、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

一、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

一、皇室の中心に考へる。この皇室の中心に考へる。この

今回もいよいよ都府共同作福(福沢)
米口の
都府共同作福と米口農林指導所との
前近経過。米口の農林指導所と同調し
米口の農林指導所から
得るのはおもしろいからこの一ではおもしろい。

戦場の中心に戦場同志の回にも
新旧の対立

新時代の現性を導くもの

新米教育

組合運動

労働基準局

人権擁護委員会

若者の政治

裁判の公正

井田氏の著作と生産力への余暇

グレイク物と自己満足と

経済への大わりは旧勢力におとくす老人

生産力への消費と満ちた生活の力と生産力

マクドナルドの力は一般に新時代の

戦場の最終回(六一五)

主旨

金の釣には直玉宗勝より夫婿宗勝(地域改革の皇外新より行政体)

新米の階層構成か
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い
階層子の脱却も不揃い

自然の村の道に字跡のついで
階層の原理の統一
或は自然への忠誠の感情
村守の根柢がすこゝ水
米、他人の尊厳、人同士の理
想が其の世代に成長しつゝ
レジャーの光景、消費の
の革命は都市の移住者
者から

母親の世帯の
二つの世界
家族の意識の
を
成長
し人を平等自由合衆

自然と人
おける民衆的個性は別

新學期

新學期に於ては、現在の下の社会を以て

家化の性質の仇に於て述べる。

日本の社会は今當てに大變革の國に

の渦中にある。この變革の方向は色々

の性質をもつてゐるが、見通しかたの事については

人が皆万人が万人を敵とする競争になつて

あつて下である。父は子を仇せず、子は父を仇せず

夫は妻を仇せず、妻は夫を仇せず、友人は互に仇

の不行も認め、並に果敢的に立つ一人一人に

蜘蛛を成し、仇し得るは自己であると思

ふ完全孤独の競争であることである。

上下の対立の社会より、横の分断の社会へ

階級階級銀の上下の対立、世代の対立、

傳統の対立、村の地域対立、

横の対立は同僚、友人の対立

仇し得るは自分の事、

グループの中の孤独、

電車の中の孤独、現代のグループの中の孤独、

万人は万人の敵の社会。

競争の定の中の人ははとの日本人も

敵。

万人の敵の社会の孤独に人は耐え

なければならぬか。

この孤独の中の伝染的な二人の協力、

三人の団結、千人の団結は天下をとるといふか

出来よの団体武勇。

リホッブスのレハイアサンの考へでは万人が千人
の敵の社会では平和を望む人の自然に答
へみには陽力を巨人的力を北の怪物を
送り一人が屠るべきか、^{社会的構成物}能力によつて一人
一人を屈服せしめ、その力を作り上げ、事が
中絶してあも、それは万人が自分の持つ武
^闘を打ち出して、折衷的して作、^{此分}契機ルよつて
作り出す事か出来よ。それが口家である。
口家は人が作つたものか、出来た口家は
他人をその思ふ通りに支配する。そして平和な
社会生活を保障する事か出来よ。

然し今日では日本は有り他人を支配す。

ハイアサン体の活動があるのみであるが、これは抑

えず万人が人なり就して一死生に有りつゝあ

るハイアサリの活動が身中にはなつたのか、人同

かつまかしにくた、たのか、ハイアサリの面前、

人は万人を敵とせず、死生にならつて、あ、

人同士の内争方向が多様となり、実定

法の様相が現はれ、いささかもあるが、あ

らり、が、然し様々人の關係の細作が

文明の自身と共に進歩を遂げ、^{遠慮なく}其の

理由があるものあり、其文化は合

理の過程を歩むまかり、あ、^{然し}愛情

生活を圍しては合理
その他の生活を圍しては愛情・愛憎か

ゆゑに其のいか

法律は人の生活の合理化に近む
然し合意法と非合意法は合理的の成否と
いへば生活を圍して適用するものは多程にな
いか、その他の生活も合意と非合意によつて
の法律するものは多程である。
法律は經濟に圍しての可適用閉さよのきもの
その他の人同生活は愛情によつて現れるす
べきものである。

を表現するが文化の上昇には必要で

あよと云ふすには同じが残してあろう。

生活を圍しては合理、その他の生活

に圍しては愛情が文化と共に存得

るのはなるのか
の爲に如何に
程 甘んず

都市におけるインテリゲンチヤ、農村におけ

る清とユイ

ヅヤマ
女山ー洞山オウヤマにある。ミカケ石ーココロ石

山の中この山の中に村長の家がある。山の中世かあつて、セミツカ水鏡ミツカミしたを玉つけれり。

大塚ーが女山のお屋敷の中にある。

王
清水寺ー女山の中にある。

ヤマトヤマト(山門)ー郡名

山門郡 栗山村の女山